

平成 12 年度



稲作情報

中通り版
第 5 号
平成 12 年 7 月 28 日

「ふくしま新世紀農業・農村確立運動」県推進本部

発行：福島県の米 稲作情報編集会議
編集：福島県農業試験場

東北地方 1 カ月予報（7 月 21 日仙台管区気象台発表）

7 月 29 日～8 月 4 日：太平洋高気圧に覆われて平年同様晴れて気温の高い日が多いでしょう。

8 月 5 日～8 月 18 日：太平洋高気圧に覆われて平年同様晴れる日が多いですが、低気圧や寒気の影響で天気
のぐずつく時期があるでしょう。平均気温は平年並の見込みです。

生育状況

- 1) 作柄解析試験の稲の生育は、草丈が長く、茎数がやや少ない。出穂期は、平年より 5 日～8 日早まる。
- 2) 現地の稲の生育は、草丈がやや長く、茎数が概ね平年並。葉色はやや淡い。出穂期は、県北で平年より 8 日～10 日早く、県中以南では 7～8 日早い。葉いもちの発生は、一部でずりこみほ場も散見される。また、カメムシの発生が多い。

表 1 作柄解析試験の幼穂形成始期と予想出穂期(月日)

場 所	移植日	品 種	幼穂形成始期		出穂期	
			本年	平年	本年	平年
本 場	5/ 1	ひとめぼれ	7. 3	7.10	7.25	8. 2
		コシヒカリ	7.12	7.19	(8. 4)	8.12
	5/15	ひとめぼれ	7.10	7.15	(8. 2)	8. 8
		コシヒカリ	7.16	7.24	(8. 8)	8.16
冷害 試験地	5/20	まいひめ	7. 7	7.11	(7.31)	8. 5
		初 星	7.11	7.16	(8. 4)	8.10

注)()内は未確定値

表 2 作柄解析試験の生育(本場 5 月 15 日植え)

品 種	年 次	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉齢 (葉)	葉色 (SPAD502)
ひとめ ぼれ	本 年	76.4	496	11.7	38.1
	前 年	64.1	597	11.5	30.9
	平年比・差	115	84	+0.2	+4.6
コシ ヒカリ	本 年	85.5	498	12.3	33.6
	前 年	71.2	575	11.7	29.3
	平年比・差	115	86	+0.8	+4.0

注)7月24日調査

移植栽培の技術ポイント

出穂が早まるため、水管理とカメムシの防除を徹底し、高品質米を生産しよう！

1) 今後の生育予測

出穂期は、幼穂形成期以降も高温で経過していることから、平坦部が平年より 6 日～8 日程度早く、高冷地が平年より 5 日～6 日早いと予想される。今後、平坦部の早いところでは、コシヒカリが 8 月 4 日頃から出穂期を迎える。高冷地では、まいひめが 7 月 31 日頃から、初星が 8 月 4 日頃から出穂期を迎える。

2) 水管理

(1) 根の健全化と作土の固さを保つため間断灌漑を基本とし、登熟向上に努める。ただし、本年は出穂期が早まり高温登熟が懸念される。30 以上の高温が継続する場合は、用水が十分に確保されるならば掛け流しを行い、それ以外では湛水深を深めに確保し、稲体の保護に努める。

(2) 早期落水は穂いもちの発生を助長し、米質の低下を招くため、適期落水（出穂後 35 日頃）を守る。

3) 穂いもち対策

7 月 16 日～25 日にかけて連続して穂いもち感染好適条件が出現したため、止葉や次葉などの上位葉での穂いもち発生が増加すると予想される。本年は出穂が早いこと上位葉での穂いもち発生は、穂いもち発生に直接結びつくことから、穂いもちを徹底防除する。

(1) 穂いもち対象の薬剤散布（散布剤）は、穂ばらみ末期と穂揃い期の 2 回を基本とし、上位葉（止葉・次葉）に穂いもちが多発していた場合は、傾穂期に追加防除を行う。

(2) 穂いもち対象の粒剤（育苗箱施用剤や水面施用剤）を施用したほ場でも、穂いもち発生を確認したら、ただちに穂いもち対象の薬剤散布を行う。

4) カメムシ防除

本年は、カメムシの発生が県内全域で多いと予想されることから、注意報が 7 月 27 日に発表された。カメムシ防除薬剤は、乳熟期（出穂期後 10 日頃）と糊熟期（出穂期後 20 日頃）に 2 回散布する。また、出穂直前に畦畔の草刈りを行うと、カメムシ類を水田に追い込む結果となるので、出穂の 10 日前以降は草刈りを行わない。

5) 紋枯病対策

本年は高温で経過しており、紋枯病が発生しやすい気象条件となっている。昨年本病が発生したほ場では、被害株数の増加が予想されるため、防除を徹底する。

6)追肥

コシヒカリの穂肥は生育量と葉色の診断により行う（第4号参照）。カラ - スケ - ル値が3以下の場合は、減数分裂期に10a当たり1.5～2kgの窒素を追肥する。また、追肥した場合は、いもち病の防除を併せて行う。

技術ポイントの基礎データ等

表3 コシヒカリの稈長および初数等の予測例

幼穂形成期の生育			成熟期の予測値		
草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉色 (カラ-スケ-ル)	初数 (百粒/㎡)	稈長 (cm)	倒伏程度 (0～400)
70	600	3.0	288	87	160
70	600	3.5	310	91	240
75	600	3.0	292	89	200
75	600	3.5	314	93	280

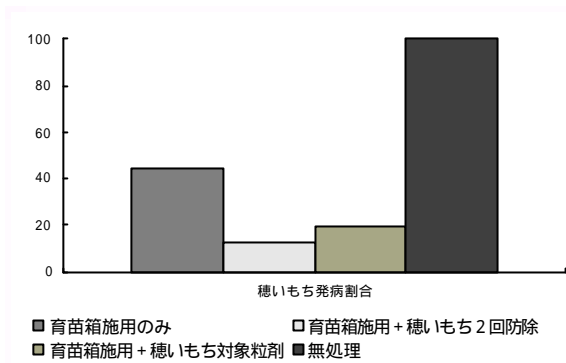


図1 育苗箱施用剤を基幹としたいもち病防除体系別の穂いもち防除効果
(無処理の穂いもち発病程度を100とした場合の体系別発病程度)

直播栽培の技術ポイント

—— いもち病の徹底防除と倒伏防止に向けたほ場の固化に努めよう！ ——

1)生育の状況

場内の生育：湛水直播は、草丈がやや長く、茎数が平年並からやや少なく、葉色は淡い。幼穂形成始期は昨年より6日～9日早い。移植稲との生育ステージの差は、4日～5日程度と推察される。
乾田直播は、草丈がやや長く、茎数が平年並からやや多い。幼穂形成始期は平年並であり、湛水直播より6日～8日程度遅れている。
現地の生育：湛水直播は、草丈がやや長く、茎数は概ね平年並。生育ステージは、平年より5日程度進んでおり、移植より5日程度遅れている。乾田直播は、草丈がやや長く、茎数がやや少ない。

2)当面の技術対策

- (1)間断灌漑を継続して、できるだけ田面の固化をはかり、倒伏防止に努める。また、早期の落水は極端に登熟を早めて品質を低下させるので絶対に行わない。
- (2)幼穂形成期を確認後、移植に準じた診断により穂肥を施用する。ただし、株元が不安定な場合や苗立ちや茎数が過剰な場合、品種がコシヒカリの場合は、施用を遅らせるか、または中止する。なお、明らかに倒伏が予測されるほ場では、倒伏軽減剤を使用するとともに、ほ場の固化に努める。
- (3)当面、移植稲と同様に葉いもち防除を徹底する。穂いもち防除にあたっては、生育ステージが移植稲よりも遅れるので、移植栽培とは別の防除体制をとる。苗立ちが過剰なほ場での紋枯病発生や生育の遅れによるイネツトムシの発生にも十分注意する。

技術ポイントの基礎データ等

表4 湛水直播稲の生育状況（本場作柄解析試験）

品種	年次	播種日	調査日	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)	幼穂形成 始期(月日)
(月日)(月日)(月日)(月日)(月日)(月日)(月日)(月日)(月日)								
本年	5.9	7.24	70.8	458	11.8	33.7	7.14	
ひとめぼれ	99年	5.7	7.23	66.4	770	10.9	37.0	7.23
98年	5.8	7.24	64.7	597	10.3	32.3	7.23	
97年	5.9	7.22	56.6	451	-	31.3	7.24	
96年	5.10	7.22	51.0	740	10.4	38.2	7.24	
本年	5.9	7.24	73.8	490	11.0	26.7	7.21	
コシヒカリ	99年	5.7	7.23	70.3	607	10.9	33.1	7.27
ヒカリ	98年	5.8	7.24	70.3	780	10.0	29.0	7.30
97年	5.9	7.22	59.8	454	11.4	31.6	7.29	
96年	5.10	7.22	51.6	821	10.9	36.9	7.28	

表5 乾田直播稲の生育状況（本場作期試験）

品種	年次	播種日	調査日	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	幼穂形成 始期(月日)
(月日)(月日)(月日)(月日)(月日)(月日)(月日)						
本年	4.26	7.24	65.6	566	7.22	
ひとめぼれ	99年	4.23	7.23	58.6	490	7.24
98年	4.22	7.24	55.4	388	7.27	
97年	4.23	7.24	70.7	520	7.23	
96年	4.25	7.29	60.7	384	7.27	
本年	4.26	7.24	72.5	550	7.27	
コシヒカリ	99年	4.23	7.23	66.3	667	7.27
ヒカリ	98年	4.22	7.24	66.1	465	7.29
97年	4.23	7.24	72.9	507	7.28	
96年	4.25	7.29	76.7	703	7.28	

麦・大豆栽培の技術ポイント

- 1)大豆の追肥：最終培土時の追肥ができなかった場合は、開花期～開花後10日頃までに硫酸または尿素で窒素成分6kg/10aの追肥を行う。
- 2)大豆病害虫の防除：今後、害虫の発生が懸念されるので、カメムシ等を対象に十分な防除を行う。
- 3)そばの播種：そばは土壌適応性が高いが、湿害に弱いため排水対策が重要である。また、無肥料では多収が望めないため、10a当たり窒素1.0～2.0kgリン酸2.5～5.0kgカリ2.5kg程度の基肥を施用する。前作の肥効が残っていると思われる場合は基肥窒素を施用せず、生育状況により開花始めまでに追肥を行う。